

**F. フレーベル教授・カリキュラム構成に関する文献調査  
－未刊行資料に着目して－**

**松 村 納央子**

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第50号抜刷）

報告・資料

## F. フレーベル教授・カリキュラム構成に関する文献調査 －未刊行資料に着目して－

Eine Erkundigung über die Materialien von Unterrichts- und Curriculumorganisation Friedrich Fröbels  
－ besonders über veröffentlichte Materialien －

松 村 納央子

### I 緒言

論者の研究関心は、「幼稚園 (Kindergarten) の父」と称される F. フレーベル (Fröbel, Friedrich Wilhelm August 1782-1852) が残した学校教育に関する手稿・未刊行資料 (とりわけ 1820 年代) の収集と解説、および教授・カリキュラム論として再構成することにある。フレーベルの最大の業績は 1840 年の「幼稚園」創設と、それ以降死去まで続けた幼児教育に関する遊具や教育論などの提唱にある、とされる。確かにその功績は教育学上否定し得ないが、その業績がなったのも、ひとえに幼児教育着手以前の約 30 年に渡る学校教育実践から導き出されたものであることは看過されてきた。そこで、論者は 2003 年 8 月に渡独、ベルリン教育史研究図書館所蔵の「ベルリン遺稿 (BN/ Berliner Nachlaß: Deutsches Institut für Internationale Pädagogische Forschung, Bibliothek für bildungsgeschichtliche Forschung [DIPF. BBF] / Archiv. Bestand der früheren Akademie der Pädagogischen Wissenschaften[Archiv. APWA])」ならびにチューリッゲン州文書館マイニンゲン分館 (Thüringisches Staat Archiv Meiningen) を調査、閲覧した。本稿はその調査に基づき、どのような未刊行資料が存在したかを報告するものである。

### II 日本におけるフレーベル研究の問題点

未刊行資料の報告に先立ち、日本におけるフレーベル研究の問題点をいくつかあげておきたい。

そもそも論者が未刊行資料に着目する契機となったのは、F. フレーベルの教育思想や教育実践を研究対象とする際、「偏った資料」による研究に留まって来たことである。本邦のみならずヨーロッパ圏においてもフレーベル研究は停滞してきた。そのことは、彼の没後 150 年経過した現在でも《全集》が出版されていないことにその一因があるだろう。ドイツ語圏においてすらこのような状況であった要因には、東西ドイツの分裂によりフレーベルの遺稿の大半を閲覧することが長らく容易ではなかったことが挙げられる。フレーベルが活動拠点としていたチューリッゲン地方は旧東ドイツに位置していた。二度の世界大戦と、それに続く東西分裂を通じ、日本人および旧西ドイツ人が閲覧可能であった未刊行資料はプロイセン文化省管轄ベルリン国立図書館に収蔵の「カイルハウ遺稿 (Keilhauer Nachlaß: Staatbibliothek Preußischer Kulturbesitz Berlin, Handschriftenabteilung, Nachlaß 186)」のみといっても過言ではない。それらの代表的なものはホフマン (Hoffmann, Erika 1902-1995) によって編集・出版されている<sup>1)</sup>。

閲覧困難であった旧東ドイツ側において保存されていた遺稿は、旧東西ドイツの統合以降いくつかは散逸した。散逸を免れた遺稿は現在国際教育学ドイツ研究所に所蔵されている「ベルリン遺稿」ならびにチューリッゲン州バート・ブランケンブルクのフレーベル博物館収蔵遺稿にて閲覧可能である。研究にあたり肝要なことは、近年になってようやく現存するフレーベル

の遺稿全てを閲覧できるようになったこと、それ故に没後150年経過した現在でも全集は刊行されていないことである。理論を体系的に叙述する機会に恵まれなかったフレーベルは、その思想の大半をメモ、日記や関係者への書簡の形で残していることも、特に日本人研究者が看過してきた事実である。換言すれば、「原典」として期待されるフレーベルの書簡類や日記といった未刊行資料、特に旧東独側の手稿・未刊行資料を用いたフレーベル研究は日本でもごくわずかである。

にもかかわらず、日本においてはあたかも『フレーベル全集』が既に発刊され、精読されているかのように考えられている。この要因として、敗戦後玉川大学出版部から『フレーベル全集』なるものが出版されたことが挙げられよう<sup>2</sup>。この『フレーベル全集』の底本は、フレーベルの死後ハンブルクの教育改革運動に参加したランゲ (Lange, Wichard 1826-1884) による『教育学著作全集』 (Lange, Wichard (Hrsg.) : Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften. 2 Abt. in 3 Bdn. Berlin 1862-74 : 以下、本論ではランゲ版著作集と記述) である。ランゲは1844年から1847年にベルリンで活動していた教育者ディースターヴェーク (Diesterweg, Friedrich Adolph Wilhelm 1790-1866) の下で助教員となり、1851年にフレーベルの協力者ミッドENDORF (Middendorf, Wilhelm 1793-1853) の娘と結婚、ハンブルクを拠点に幼稚園運動や教員組合活動の中心人物であった。ランゲ版著作集が編纂されるにあたって、その序言にはランゲ自ら、フレーベルの教育哲学、とりわけ「民族教育 (Volkserziehung)」<sup>3</sup> ならびに幼児教育に関わる文書を選択したことを記している。この記述は、フレーベルの諸著作を編纂当時の教育改革運動の思想的基盤としようとしたランゲの意図の現れと推察できよう。さらに、ランゲはこうした編纂意図から外れた原典を意図的に削除あるいは改ざんして公刊したこともドイツのフレーベル研究者ハイラントらが指摘している<sup>4</sup> 点にも留意せねばなるまい。

加えて「フレーベルはロマン主義教育者である」という従来の定式を、今一度検討すべき時期にきている

ことを指摘したい。既に文学史上では代表的な「ロマン主義」思索家らの著作 (刊行物) のみならず、日記や書簡類を活用したいわゆる伝記的研究によって、「ロマン主義」思想は決して幻想に逃避するものではなく、幻想的なものを喚起させるレトリックを用いることにより、当時の現実を批判する方向性を有していたことが示された。近年ドイツ本国のフレーベル研究第一人者のひとりハイラントによれば、フレーベルは当時学問の新領域の一つであった鉱物学に一時期専念し、そこで得た知見を発展させ、後年「科学性」の追求を教育活動において実現しようとしたことが示唆されているが、これもまたフレーベル像の解体を促す契機となっている。このような「科学性」に焦点をあてた研究、フレーベルの主著『人間の教育』(1826年発表) を教授・カリキュラム論として読解したものは、日本においては皆無とあって良い。この研究上の傾向を助長させた理由の一つには「フレーベルすなわち幼稚園の創設者」という歴史上の一業績を基にした定見であり、戦時中までになされた“フレーベル=幼児教育の父”並びに“フレーベル=ロマン主義の教育者”への定式化の展開が大きく関わっている<sup>5</sup>。無論、教授体系の確立期にあった1820年代の活動を教授論として再構成しようという試みは、日本では等閑視されてきた。そのことを踏まえ、論者はこれまでF. フレーベルの学校設立計画「ヘルバ・プラン」(1828-29年)の詳細ならびにその計画立案を支える哲学的基盤(認識論)について追求してきた。この一連の研究においてフレーベルが「科学性」を重視していたこと、ならびにその計画が実施される予定であったマイニンゲン公国の実情を鑑みて提案していたことが明らかになった。フレーベルにおいては「科学性」を有する事物の体系的・効率的配列および教育として教授を捉えていたと仮定した上で、従来の文学史上の定義に従ったフレーベル像、換言すれば熱狂的なものや憧憬的なもの、夢想的なもの、詩的なもの、郷愁への思慕にあらわれるような、人間生来にそなわった善性を信奉する集団としての「ロマン主義」教育者として位置づけられてきたフレーベル像そのものを吟味する点が論者の目指

す問題解明のひとつである。

### Ⅲ 教授体系・教授論の解明につながると予想される 未刊行資料

#### ◆教授・カリキュラム論の全体像を再構成しうる資料 (BN)

論者はベルリン遺稿を中心に、フレーベルの教授・カリキュラム論は当時の地域の実情を考慮して構成されているとの仮説から、地域特殊性ならびにフレーベルの事実認識を示すような資料、その認識のもとで彼の教授・カリキュラム論においてどのような成果をあげているかを示す資料の有無を調査した。

本調査において着目した点は、フレーベルの遺稿において「人間陶冶 (Menschenbildung)<sup>6</sup>」や「学校 (Schule)」という術語を用いているか否かである。

また、当時の実践記録に準ずるものとして、フレーベルの教育舎で学んだ生徒のノートも参考資料となると判断した。

Sig.[Signatur] 46 : "Menschenbildung" , Teilentwurf, um 1850, 1 Bl[Blatt], egh[eigenhändig] (『人間陶冶』構想の一部、1850年頃、1葉、自筆)

Sig. 193 : Anzeigen, Stundenpläne, Schülerlisten 1821-1836, ca. 31 Bl, ZS[zeitgenössische]/ Dr[Druck]/ egh .....einige teilen stehen in Bad Brankenburg FröbelMuseum[BIM] (1821年から1836年にかけての広告、時間割、生徒名簿、およそ31葉、当時の印刷物…一部はバートブランケンブルクにある<sup>7</sup>)

Sig. 200 : Abschlusszeugnisentwürfe für die Zöglinge Luis Blumberg, Friedrich Bock, Fritz Pfeiffer und Leopold Teske. o.D.; 1829 ; 1839. 19 Bl., Midd[Wilhelm Middendorff] / egh (ルイース・ブルムベルク、フリードリヒ・ボック、フリッツ・プファイファー、レオポルト・テスケら生徒の卒業成績証明書の下書き、日付けなし、1829年、1839年、19葉、ミッテンド

ルフの自筆)

Sig. 201 : Schul- und Studienhefte. v.a. Hefte der Neffen Ferdinand, Theodor und Wilhelm Fröbel. 1821-1834, o.D. 8 St. (フレーベルの甥フェルディナンド、テオドール、ヴィルヘルムの学習ノート、1821-1834年)

Sig. 203 : Ausarbeitung von Grundsätzen und Plan für die Einrichtung einer Volkserziehungsanstalt in Helba bei Meiningen. Notizen und Entwürfe, z. T. fragmentarisch. Jan. - März 1828. 63 Bl., Midd/ egh. (マイニンゲン近郊ヘルバの民衆教育舎設立のための原理と計画。メモと構想、一部分は断片的。1828年1-3月。63葉)  
dabei : zwei Begleitschreibenentwürfe zn Ludwig Nonne, um 28. Febr. und 30. März 1828 (Bl. 48 Rs - 49 und 62 Rs - 63) / Briefentwurf an Bernhardt Erich Freund Herzog von Sachsen-Meiningen-Hildburghausen, 8. Nov. 1828 (Bl. 63 - 65) / Teilabschrift von Wichard Lange (Bl. 33 - 34)

Sig. 204 : Ausarbeitung von Anzeige und Stundenplan für die geplante Volkserziehungsanstalt in Helba. Entwürfe, Reinschriften, Druckexemplare 1829. 11 Bl., ZS/ egh/ Dr. (計画されたヘルバの民衆教育舎のための公告と時間割。構想、清書。印刷見本。1829年。11葉)  
dabei : Begleitschreibenentwurf Heinrich Langethals an den Allgemeinen Anzeiger und Nationalzeitung der Deutschen in Gotha (Bl. 3) / Briefentwurfsfragment an die Konsistorien in Hildburghausen und Weimar (Bl. 1 und 7) / Begleitschreibenentwurfsfragment an Ludwig Nonne (? , Bl. 5 Rs) / von Ludwig Nonne korrigierte Reinschrift siehe Briefwechsel mit Nonne.

Sig. 283 : Tageblätter 1822- Juli 1829. u. a. Keilhau. 71 Bl., egh/ 1 Bl., Dr. (日報。カイルハウ、1822年-1829年7月など。71葉)

dabei : Abhandlungsvorarbeiten[BN] / Briefentwürfe an unbekannte Empfänger (K. u. W., Orkloff (?), Schrimmer (?), ein Freund) Juli 1822 (bl. 37 - 44) [BIM]

Sig. 583 : NONNE, Ludwig 1827-1845, AB : 9 (?), EB : 11, BN-46 Bl., BIM-2 Bl.

dabei : AB an der Herzog von Sachsen-Meiningen-Hildburghausen, 8. Nov. 1828 (Bl. 15 Rs -16) / B von Carl Clemens an J. A. Barop, 1829 (bl. 19 Rs - 18 Rs) / Ab vo Febr. 1828 siehe Nr. 203 Bl. 48 Rs - 49 / AB vom 30. März 1828 siehe Nr. 203 Bl. 62 Rs - 63 / AB (?) von 1829 siehe Nr. 204 Bl. 5 Rs / AB (?) o.D. siehe Nr. 577 Bl. 4 - 5.

◆ 主として自然諸科学（とりわけ「自然誌」）教授に関する論考（BN）

また、『人間の教育』の教授編に収められた「自然観察 (Naturbetrachtung)」に関する記述において、「観察 (Betrachtung)」を認識論として解釈するだけでなく、教授の方法論としても解釈している。そこでは、当時の思考様式であった機械論と有機体論との対照から、自律的活動性を認めた「自然」観を有している当時のフレーベルの態度が推察できるのではないと思われる。

フレーベルが教授論において自らの立場とするのは有機体論である。有機体論の特色として、存在するのは決して単体のみとして観察されるのではなく、その構造が他の構造の一部であったり、あるいは他の単体と連関を持って存在するとみなすことが挙げられる。この有機体論はフレーベルがペスタロッチーのイヴェルドン学園滞在中に着想を得た言語教授構想においてもみられる<sup>8</sup>が、さらにベルリン大学のヴァイスの下で鉱物学を修めた時期に深化したと考えられている。

Sig. 334 : Weiß, Christian Samuel : Über des

philosophische Studium der Naturwissenschaft. Nachschrift um 1816. 10 Bl., egh. (ヴァイス自然科学の哲学的研究について)

Sig. 337 : Weiß, Christian Samuel : Kristallographie. Nachschrift zwischen 1814/16. 21 Bl. egh. (ヴァイス鉱物学。1814年から1816年の講義録。21葉)

フレーベルの有機体論もその例に漏れないが、この態度が最も如実に発揮されるのは、「自然誌 (Naturgeschichte)」の科目である。「自然誌」とは、存在するものに自律的活動性を認めた上で、生物・地質鉱物・気象・技術等、雑多な事柄について目録を作成する教授である。ここにフレーベルの教授論やカリキュラム論の特色が見られよう。

Sig. 202: Ausarbeitungen und Tabellen zur Botanik. Okt. 1828, o.D. 4 St., 23 Bl. ZS/ Midd/ egh (植物学のための推敲と図表)

また、フレーベルが幼児教育に本格的に着手した後も、自然科学への志向性は失われていないことが示唆される手稿も存在する。

Sig. 307 : Philosophisch-erziehungstheoretische Notizen. o.D. ca. 90 Bl. egh.[BN/ BIM] (哲学的・教育学的理論に関するメモ。日付けなし、約90葉)

dabei : Notizen zu einer "Übersicht des erziehenden Unterrichte vom Eintritt in die Schule bis zur Urteilsreife..." (zwischen Bl. 54/ 77)

307番の資料は、少なくとも1842年5月から12月以降に記されたものであると推測される (Bl. 1."RUDORSTAST 15 MAI 1842"のスタンプあり / Bl. 3 "27 Dec 42" スタンプ入りの封筒に走り書き)。1811年に初めて体系化しようと試みたフレーベルの世界観<sup>9</sup>の特徴である「球体法則 (das sphärisches Gesetz)」

を再び広く世間に解説しようと、思索を深めたのではないかと思われる。特に、Bl. 34/Bl. 34I. においては、球が中心より三つの線で六つに分割し、ある一本の線の片端をプラス極、もう一方をマイナス極として覚書し、その解釈を文章化しようとしたものと考えられる。また、Bl. 35 では、中心に円を描いた上で放射線上になるよう走り書きしている。

#### IV ドイツ地方文教政策史としての新たな展開が見込まれる未刊行資料

19世紀前半におけるチューリッゲン諸邦、とりわけマイニンゲン公国の文教行政ならびに人口・産業・地図等、地域性を明らかにするための未刊行資料を論者はマイニンゲン文書館にて収集した。

フレーベルの教育活動拠点でもあり、思想形成の場でもあったチューリッゲン地方の地域的特性と彼の思想展開との関連を問うことは、なおも研究課題として残されている。その要因のひとつには、19世紀前半ドイツの地方文教政策に関する体系的研究が日本においてはほとんど皆無である点にある。ドイツ文教政策に関する研究はプロイセンに偏向しており、その他の領邦、とりわけ小領邦の政策に言及するものは管見の限りにおいてはみとめられない。また、チューリッゲン地方はW. フリットナーの研究において様々な文教行政改革ならびに20世紀前半の改革教育運動の土壌として概説されているが、その詳細についてはなおも解明が残されている。加えて、フリットナー<sup>10</sup>や小笠原<sup>11</sup>の研究では、そうした地盤の特殊性を示唆するに留まっている。

上記のことを視野にいれ、ザクセン・マイニンゲン公国関連遺稿を閲覧した。

#### ◆ 「ヘルバ・プラン」に関する資料

・ Staatsministerium, Abt. Finanzen;

Nr. 9867: Kauf des Rittergutes Helba/ Laufzeit:1807 - 1812

Nr. 9868: Übergabe des Rittergutes Helba an die

herzoglich Kammer/ Laufzeit: 1811

Nr. 9869: Überweisung des Bosischen Rittergutes zu Helba und Johannisberg mit allem Zubehör an die Landesherrschaft zu Meiningen als Käuferin. L: 1811

Nr. 9870: Administration der Güter Helba und Johannisberg. Enthält auch: Thurmgerichtsrechnung 1810-1811. L. 1811

Nr. 9871: Erwerbung des Gutes Helba.- Differenz zwischen der herzoglichen Schuldentilgungskommission und den v. Bosischen Erben betr. Kaufgelderrückstand. - Ablösung der dem Kammergut Helba von den Einwohnern daselbst zu leistenden Fronen. L. 1811-1818, 1834-1837

Nr. 9872: Erkaufung des Rittergutes zu Helba. L. 1812-1814

Nr. 9873: Administration der Güter Helba und Johannisberg. L. 1812

Nr. 9874: Administration der Güter Helba und Johannisberg. L. 1813/1814

Nr. 9875: Erkaufung des Rittergutes Helba. L. 1814-1817

Nr. 9878: Administration der Güter Helba und Johannisberg. L. 1816-1818

Nr. 9927: Verpachtung der Güter Helba und Johannisberg, incl. die eigene Administration dieser Güter. L. 1815-1823

Nr. 9928: Verpachtung der Güter Helba und Johannisberg. L. 1817-1823



Nr. 9929: Verpachtung am Carl Christian Damman.  
L.1818

Nr. 9931: Pachtverhältnisse des Pächters Dommann zu  
Helba. L: 1828-1833

#### ◆ 19世紀前半のヘルバにおける文教政策に関する文書

・ Staatsministerium, Abt. für Kirchen- u. Schulsachen;  
Nr. 7637-7647: Volksschulwesen, sonstiges Helba

今回の調査では、「ヘルバ・プラン」交渉に関する文書ならびにヘルバでの民衆陶冶の実態が明らかになるような文書を見いだすことを優先した。マイニンゲン文書館に現存する関連資料には、主として枢密院関連において財政に関する文書ならびに文教行政に関する文書に、フレーベルとの交渉に関するものや、フレーベルへの返答事項などが記載されたものが存在した。また、1850年前後にフレーベルは再度マイニンゲン公国と関係を持っている（マリーエンタールの城を借り受ける）が、今回の調査では着手することができなかった。今後の課題の一つとなろう。

#### V 結びにかえて—教授理論解明への課題

ここで、「ロマン主義」教育者として位置づけられてきたフレーベル像そのものを吟味する方向において、考察の枠組みについて触れたい。

まず、「教授」という術語について考えたい。教育学では、この術語は《学芸・技術を教える》ことを指す。また、個々の《教える》行為を考察するばかりでなく、そうした行為の積み重ねによる連続性・連関やその行為全てによって構成される現実全体を指す語でもある。フレーベルは、その著作において「教授」を「教育 (Erziehung)」や「教訓 (Lehre)」と同列に扱い、並記することが多かった。そのことは、教授という行為の連関性を重視したものとも推察できよう。しかしながら、教授を学校教育における授業方法論として捉

える教授学 (Didaktik) の文脈でフレーベルの思想を理解しようとする、《いかにして教えるか》、またその「ロマン主義的傾向」を汲み取って《いかに生徒の情感に訴えるか》として「教授」を解釈する傾向が生じる。しかし、当時のフレーベルの教授論の主軸には《いかに論理的に提示するか》、そのために《眼前の事象はどのように生起しているか》という世界観まで取り扱う領域まで包含していると思われる。

また、フレーベルの著作を考察するにあたり、歴史的な文脈にも注意しておきたい。ここでは、地域史として踏まえておくべき事柄としてフレーベルがルター派主流の土地に生まれ育ったこと、論者が考察対象としている1820年代の活動地域もルター派主流の地域であったことを指摘しておく。フレーベルのレトリックはしばしば新約聖書のメタファーを借用しているが、それもまた定義し難い教授論で取り扱われる事象を特徴づけるために用いられた可能性も考えられる。

以上の事柄を踏まえ、今後資料精読にあたりたい。

#### VI 註

<sup>1</sup> Hoffmann, Erika/ Heiland, Helmut/ Wähler, Reinhold (Hrsg.) : Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften. 5 Bde. Stuttgart 1951-1986

<sup>2</sup> 小原國芳・莊司雅子監修『フレーベル全集』全5巻、玉川大学出版部、1977-1981年

<sup>3</sup> フレーベルの著述で用いられている „ Volk “を「民族」と訳す妥当性は、今後吟味すべきであろう。というのも、フレーベルの著作がドイツ語から日本語に訳されたのは1920年代以降であり、当時の日本の状況が総力戦体制化に向かっていくことを考慮せねばならないからである。

<sup>4</sup> vgl.: Gebel, Michael/ Heiland, Helmut/ Proll, Hans: Fröbel in seinen Briefen: Bemerkungen anläßlich der Edition einer Fröbelbriefausgabe. In: Zeitschrift für Pädagogik, 43 (1997) 3, S.375 - 393

<sup>5</sup> 日中戦争戦時下においてフレーベルをロマン主義の教育者と位置づけたのは、空本和助 (1905-1990) や 莊司雅子 (1909-1998) といった、広島高等文理科大学卒業の研究者であった。両者は渡独経験のあった長田新から文献を提供されており、特にプリューファーやツインマーマンといった当時のドイツを代表するフレーベル研究者らの定式化を受容して研究

している。vgl. Matsumura, Naoko: Die Geschichte der Fröbelforschung an der Universität Hiroshima bis 1945 – unter besonderer Berücksichtigung der Fröbelforschung von Wasuke SORAMOTOs (1905-1990) – In: Heilnd, Helmut/ Gutjahr, Elisabeth/ Neumann, Karl (Hrsg.) : Fröbels Pädagogik. Verstehen Interpretieren Weiterführen. Deutscher Studien Verlag Weinheim 2003, S. 132-141

<sup>6</sup> 特に「陶冶 (Bildung)」という術語は、フレーベルが教育活動を展開した19世紀前半においては、神の似姿として完全性を追求する「人間 <Menschen> への教育」という側面と「市民 <Bürger> への教育」という側面を有する。「人間への教育」を目標とするならば、「陶冶」は「教育 (Erziehung)」と同義であり、フレーベルも『人間の教育 (Die Menschenerziehung, 1826)』においてこの二つの術語と「教授 (Unterricht)」と併置して使用している。他方で、「市民への教育」を目標とする営みは一般に民衆教育 <Volkserziehung, -bildung> と特徴づけられる。フレーベルが一つの術語に対して複数の指示内容を持たせたのか否かは今後の読解作業において注意すべき点であろう。

<sup>7</sup> 論者はフレーベル博物館にはまだ問い合わせていない。

<sup>8</sup> 拙論 (松村尚子) 「F. フレーベルにおける言語教授と認識をめぐる問題 – 学校教育構想に関する論考を手がかりに –」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第47巻第1部、2002年3月所収を参照のこと。

<sup>9</sup> 教育という営為において、教育者の世界観 (Weltanschauung) は教育目標や教育方法の提示に著しく関わっていることは周知のことと存ずる。「世界観」という術語は、単なる知的把握に留まらず、対象への直接的・間接的な情意を含んだ評価をも内包することを意味している。もっとも、論者はフレーベルにおける「世界観」が必ずしもデイルタイの術語である「世界観学」を先取したものと想定して論じているのではない。

<sup>10</sup> Flitner, Wilhelm: Wissenschaft und Schulwesen in Thüringen von 1550 bis 1933. In: Erlinghagen, Karl/ Flitner, Andreas/ Herrmann, Ulrich (Hrsg.) : Wilhelm Flitner gesammelte Schriften. Bd. 5. Paderborn 1985, S. 233-246.

<sup>11</sup> 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年

レーベル教授・カリキュラム論の解明」成果の一部である。

(2004年12月1日 受理)

注記：本論は文部科学省科学研究費補助金 [若手研究 (B)] の交付対象となった研究「未刊行資料に基づく1820年代F.フ



